

報道関係者各位

令和5年7月6日（木）
感染症対策企画グループ
感染症対策企画監 大森 栄治
直通 055-223-1321（内線1405）

ヘルパンギーナの流行状況について（警報レベル入り）

令和5年第26週（6月26日～7月2日）の感染症発生動向調査の結果は次のとおりです。

ヘルパンギーナの定点あたり報告数

中北保健所管内：**9.50**人^{※1}

富士・東部保健所管内：**6.40**人^{※2}

警報レベル基準値である6.00以上となったことから、**中北保健所管内及び富士・東部保健所管内はヘルパンギーナの警報レベル^{※3}に入りました。**

県内で大きな流行が発生または継続しつつあることから、別紙の予防対策を改めて県民に周知したいので、報道機関の皆様方に御協力をお願いいたします。

※1 【中北保健所管内】 定点数8医療機関合計報告数76人 76人÷8医療機関≒9.50人

※2 【富士・東部保健所管内】 定点数5医療機関合計報告数32人 32人÷5医療機関≒6.40人

※3 保健所管内ごとの定点1医療機関あたりの報告数が6.00以上で警報レベル

（注意報レベルの設定なし。定点あたり報告数が2.0を下回ると解除。）

【直近の数値】

週	中北	峡東	峡南	富士・東部
26週（6/26～7/2）	9.50	3.75	4.50	6.40
25週（6/19～6/25）	3.88	4.75	0.00	4.60
24週（6/12～6/18）	0.75	2.00	0.00	1.80
23週（6/5～6/11）	0.25	0.50	0.00	0.80

（参考）

甲府市	山梨県
8.00	7.17
2.40	3.54
2.00	1.38
0.60	0.46

【過去の流行状況】

警報レベル入り 平成30年30週（7/23～7/29）～32週（8/6～8/12）

中北保健所：30週～31週（7/30～8/5）

中北保健所峡北支所：30週～32週

ヘルパンギーナ

●ヘルパンギーナとはどんな病気？

- ✓ 発熱と、口の中に水疱性の発疹があらわれるウイルス性の感染症です。
- ✓ 例年、7月頃にかけてピークがみられ、夏かぜの代表的疾患といわれています。
- ✓ 患者の年齢は、5歳以下がほとんどで、1歳代が最も多くみられます。
- ✓ 病気の原因となるウイルスは、エンテロウイルス属、主にコクサッキーウイルスA群の感染が多くなっています。
- ✓ 感染症法では定点把握対象の5類感染症に分類され、一部の小児科医療機関が届出基準に基づいて診断した場合、保健所に届出がされることになっています。

●どんな症状があるの？

- ✓ 感染してから2～4日後に、突然の発熱に続いて咽頭痛が出現し、咽頭粘膜の発赤が顕著となり、口の中に直径1～2mm、大きいものは5mmくらいの小水疱ができます。やがて小水疱は破れ、浅い潰瘍になり、痛みを伴います。発熱は、2～4日間程度で解熱し、ほとんどの患者は予後が良好です。
- ✓ まれに無菌性髄膜炎、急性心筋炎などを合併することがあり、経過観察を行い、頭痛、嘔吐、心不全徴候等の出現に注意をする必要があります。

●どうやって感染するの？

- ✓ 感染経路は、**飛沫感染**（患者の唾液や鼻汁がくしゃみやせきで飛び散ることや、吸い込むことで感染）、**接触感染**（患者の手やさわったものを介して、口に入れたり鼻をさわったり目をこすったりすることで感染）、**糞口感染**（便の中に排泄されたウイルスが口に入ることで感染）があります。

●治療方法と予防策は？

- ✓ ウイルス性の感染症のため抗菌薬は効果がありません。通常は対症療法のみで、発熱や頭痛、口の中の水疱の痛みなどに対して解熱・鎮痛剤を用いることがあります。水分摂取を心がけ、安静と栄養に気をつけることが大切です。
- ✓ ヘルパンギーナに対する予防接種はありません。回復した後でも、2～4週間の長期にわたり、ウイルスが便の中に排出されることがあるので、感染を予防するために手洗いをしっかりとし、排泄物を適切に処理しましょう。また、タオルの共用をしないようにしましょう。
- ✓ 感染者との密な接触を避けること、流行時に手指の消毒を励行して予防しましょう。
- ✓ ヘルパンギーナの原因となるコクサッキーウイルスA群はアルコール消毒剤に抵抗力が高いため、次亜塩素酸ナトリウム等での消毒を行いましょう。

<お問合せ先>

感染症対策企画グループ

情報・企画 山本・保坂（内線1421・1422）

電話 055-223-1490